

## 第9回 不測の事態で試される教育の質

新型コロナウイルスは社会に大きな影響を及ぼし、人の生活、経済、政治、そして教育までも変えようとしています。東日本大震災で原子力発電所が想定外の津波により破壊され、メルトダウンするという不測の事故が起きました。今回のコロナウイルスによる影響もまさに不測の事態です。不測の事態が起きると様々な問題が露見してきます。

教育においても三蜜を避け、通学授業の代わりにオンライン授業が多くの教育機関で行われています。国内の小・中・高校の ICT 活用教育が始まってから 25 年経っていますが、未だに国内の教育の ICT 化は諸外国に比べればかなり遅れている状況です。コロナウイルスの影響で政府や自治体はオンラインでの授業実施に向け、「学校のパソコンの充足」や「無線 LAN の整備」の必要性を真剣に考え始めました。かなり前に整備されていたはずの環境ですが、これまで後回しにしていた「つけ」が回ってきたとも言えるでしょう。突然オンライン学習が必要になったから環境を整備しようと言い、それで整備されたとしても効果的なオンライン学習ができるはずはありません。国内のオンライン学習が普及しない最大の原因は教員の ICT 活用スキルにあるからです。単純に黒板を使った通常の授業を撮影して、動画で見られるようにするというだけでも、機器を使う技術的なスキルはもちろんのこと、対面ではなくネットワークの向こう側にいる学習者を意識しなければなりません。特に授業で重要となる「発問」の技を発揮できません。オンラインでの授業経験がない教員にとっては大変でしょう。

私が所属する大学でも少なくとも春学期はオンライン学習に移行することになりました。現在、多くの大学がオンライン学習を推進するための e-Learning システムを保有していると思います。それでも数十年前に既に 100%の大学が e-Learning システムを有している欧米と比較すると日本の大学の整備は遅れています。しかし、e-Learning システムを有している大学でさえ、今回のコロナ対応のオンライン学習に対して、そのシステムが役立たなかったことに気づいたのではないのでしょうか。ほとんどの e-Learning システムは対面授業の効果を上げるために、ブレンド型の利用形態を想定しています。そのため、数千人の通学の学生が一斉に（カリキュラムに即して）システムを利用する事態を考えておりません。その結果、同時アクセスにシステムが耐えられず、やむなく自前のシステム利用を断念した大学も多く出たのではないのでしょうか。これも不測の事態です。通信教育を e-Learning で提供している大学では、数千人の学生が居てもほとんど問題ありません。学生によるアクセスが分散されているためです。通学の学生全員がカリキュラムに即したオンライン学習を行うことを想定したシステム設計にならなかったため、大手企業が無償で提供しているシステムを利用しているのではないのでしょうか。例えばオンデマンドの学習が可能な Google Classroom や同時双方向の学習が可能な Google Meet、あるいは Zoom といった

システムが利用されていると思います。不測の事態でも耐えられるシステムを世界中のユーザを対象に提供している大企業の施策と実践に、改めて感服します。

今回のオンライン授業は教員の質や学生の質を見極めることにもなっているのではないのでしょうか。今年度に限り著作権者の利益を不当に害することになる場合を除き、授業目的のために無償で他者の著作物を公衆送信できるようになっています。このため、他者の著作物を教材としてオンライン学習システム上に掲載し、課題を提出させるといった「授業もどき」が行われているかもしれません。あるいはパワーポイント（PPT）で作成した資料をシステムにアップし、同様に課題を提出させる「授業もどき」が行われているかもしれません。PPTはプレゼンテーションツール、すなわち、プレゼンテーションする側にとってツールであって、ラーニングツールではありません。ポイントだけがかかれているため、独学できる教材ではありません。それを基に学習させようとする自体、学習効果は期待できません。こういった授業では教員が存在する意味がありません。例えば、PPT資料を教材として使う場合でも、その資料を詳しく教員が説明した動画を教材として提供する、あるいは理解を容易にするための補足資料を提供するなど、学習者が独学できるような学習環境を提供することが教員にとって必要となります。

それから、授業を成立させるためには学習者との双方向性が確保される、すなわち、学生の意見をくみ上げ、それに教員がフィードバックすることや、学習者同士の意見交換の実現が必要となります。通常の大教室での対面授業と比較すると、オンライン授業では教材作成や学習者への対応において、教員の負担はかなり大きくなります。それをきちんと行っているかどうかで教員の質も評価されます。学生から評価されることとなります。これまでは授業で教員が学生を評価してきましたが、オンライン学習になると、教員は教育の質を学生から評価されることになると思います。

さらに、オンライン学習では生徒の質というか、学習に積極的な学生ほど効果的な学習ができるものとも言えます。もちろんこれは教員も積極的に授業に参加しているということが前提です。大学ではゼミという少人数授業の他に大教室の授業が多く存在します。対面の大教室授業を実践するなかでは、学生からの意見や発言はほとんどありません。これは質問が無いためではなく、「質問や発言をしないという周りの雰囲気」に従っているためです。これがオンライン学習になると、学習に積極的な学生は質問や発言をします。オンデマンドの形態では個人ごとに授業時間外でも質問や発言ができるため、対面授業には見られないことが起こります。教員がそれに回答するとその学生にとって有意義な学習に繋がります。中には、1人の学生と数回にわたって意見のやりとりも交わされます。これは私が今行っている授業の中で経験していることです。このことは、学習に積極的な学生にとっては対面授業以上に学習内容の理解が進み、教育の質が向上することが期待できます。

このように不測の事態が教育の質、教員の質、学生の質にまで影響を与えています。こ

これまでなかなか気づかなかったことが不測の事態によって、新たに露見されてきます。これまで実践しなかったことが実践せざるを得ない状況になってきます。これは良いことだと思います。人は何も起こらなければこれまで行ってきたことが当たり前のことだと誤解してしまい。それがおかしいことだとも感じません。オンライン学習の重要性に気づき、もしかしたら小・中・高の教育の ICT 化も他の国並みに環境整備が行われ、教員のスキルアップにも力が注がれるようになるかもしれません。

誰一人としてコロナウイルスの発生や蔓延を歓迎するものはいません。教育においても児童・生徒・学生から学校における学習の場と機会を奪ってしまいました。学習する権利の侵害、教育の不平等などの悪影響は非常に大きいです。そのなかでコロナがもたらした功罪の「教育に与えた功」を敢えて考えてみると、教育改革、しかも教授する者の考え方、そして学習する者の考え方、さらに教育（学習）環境を変えざるを得ない状況にしたということではないでしょうか。この経験を機に、教授者、学習者そして組織が改めて教育の質を考えることになることが救いだと思います。

篠原正典（佛教大学）